

野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

マムシグサ *Arisaema serratum* (Thunb.) Schott (サトイモ科 Araceae)

なんとも不気味な感じのする植物です。4～6月頃、少し野山に入ると薄暗いスギ林の下などにヌーと生えていて幽霊でもいるような印象を受けます。その上、茎（偽茎）がまだら模様で、その様子が蝮（マムシ）に似ていることからマムシグサの名がついたそうです。秋には真っ赤な実をつけ、それがまた何とも異様な感じです。地下の芋（球茎）はテンナンショウ（天南星）と言い、デンプン、サポニン、アミノ酸類、安息香酸、シュウ酸カルシウムなどを含み、漢方で去痰、鎮癌薬とし、民間で腫れ物、肩こり等に外用します。



写真1 マムシグサ（新芽）

テンナンショウ（天南星：*Arisaema*、マムシグサの仲間）属はコンニャク、ミズバショウ、カラスビシャク（生薬名：半夏）などと同じサトイモ科の植物で、日本では約30種（ウラシマソウ、ユキモチソウ、ムサシアブミ等）が知られていますが、変異が多くこれからも新種が発見される可能性が高いといわれています。テンナンショウ属は一般に雌雄異株とされていますが、性転換することが大きな特徴です。すなわち、本属植物は成長の度合いや栄養状態によって雄株（♂）になったり、雌株（♀）になったりします。固体が小さいときは雄株で、大きくなると雌株になり、さらに何らかの原因で大きな株が小さくなると再び、雄株に戻ることが出来るという、何とも、環境適応性の高い、融通性のある性質をもっていることとなります。又、花（正しくは肉穂花序を仏炎苞が包んでいる）の構造についてもテンナンショウ属は非常に巧妙な仕組みをもっています。それは「ネズミ返しがついていること」と「雄株の花にはすき間があるが、雌株の花にはすき間がない」ということです。受粉の際、キノコバエという昆虫に花粉を運んでもらうのですが、雌雄株とも花序の先端部の付属体といわれる棒状のものにネズミ返し



写真2 マムシグサの雌花断面（左）、未熟果実（中央）、成熟果実（右）

ついており、一度、花に入り込んだハエは花の上部からは出ることが出来ず、中で暴れ回り、たっぷりと花粉を身体につけ、ようやく花の下部のすき間から出、雌花に花粉を運びます。しかしながら、雌花にはすき間がないため、受粉という仕事を終え、用のなくなったハエは雌花の中で死んでしまいます。植物の生き残り作戦の一つでしょうが、残酷といえば残酷な話で身につまされますね。

埼玉県では、ちょっと、山へ入った田畑の畔などでよく見かけます。昨年の5月、埼玉県民の森で何十株という群落が一斉に新芽を立てている様子は何とも言えない奇妙な光景でした。